

私にとって「日本文化」とは何か

三代 純平

- 1．はじめに
- 2．文化とは何か
- 3．「日本文化」ということばの矛盾
- 4．芸術・社会習慣と個
 - ．芸術
 - ．社会習慣
- 5．集団と個
- 6．ことばと文化
- 7．結論

1．はじめに

本稿は早稲田大学日本語教育センターの平成十三年度後期の「日本事情」の授業を基に書かれている。クラスは留学生・日本人学生の合同クラスで、各自が「私にとって日本文化とは何か」というテーマでレポートを書き、それについて授業で議論し、それを踏まえて再び、各々が同じテーマでレポートを作成するというものであった。本稿は私はその授業に参加し作成したレポートに多少の訂正を加えたものであることをお断りしたい。

本稿では最初に私なりの文化の捉え方について述べ、それに伴う「日本文化」ということばのもつ矛盾について言及する。また、その際に授業でなされて批判等を基に個の形成、ことばと文化の関係についても触れていきたい。

2 . 文化とは何か

普段、何気なく文化ということばを使用しているとき、その意味は文脈で大きく二つに分類できるような気がする。一つは、文学、絵画などの芸術や建造物を指し示す。この意味において文化ということばを使うとき、文化はたいていの場合プラスのニュアンスを帯びているようだ。文化人、文化遺産などの文化は一般的にこちらの意味で使われているようである。一方、文化はある地域や集団の生活習慣、生活様式などを表すときもある。「あそこの文化ではご飯を食べる」「その地域は家に入るのに靴を脱ぐという文化を持っている」などというときはこの意味において文化ということばを使用しているようだ。

だが、文化ということばを改めて考え直すとき、この分類がいかにか曖昧かということに気がつく。芸術を文化だとしても、その芸術の文化的価値を決めるものこそが、実は文化ではないのかという矛盾がそこにはある。高尚なものとしての文化を絶対的に高尚だとする理由は実はないのである。文化人ということばには他者を見下す一部の人間が用いるある種の傲慢なエリート意識さえ垣間見られる。また、生活習慣、様式も、ある地域、ある集団という枠でくくることのできない多様性を持っている。その多様性を排除した形で、ある特定の地域、集団の生活習慣、様式を文化ということばで画一的に表現してしまうことには限界を感じずにはいられない。

従って、普段、無反省に大別して二つの文脈で用いている文化ということばではあるが、それは文化ということばの定義には成りえないと私は思う。そこで、私は最初の「日本事情」の授業で二十代の中国人女性Aが「文化とは芸術や、社会習慣そのものではなく、その後ろにある精神的なものを言う」という指摘を思い出す。確かに、芸術は芸術家の精神を表現したものといえることができる。また生活習慣もその表現者の精神を反映しているとは考えられないだろうか。待遇表現、食生活など必ず、その実行者と精神と関わりを持つであろう。そこで私は文化とは精神的なものが表現された形、もしくは表現されていく過程である定義したい。つまり、芸術はその芸術的価値において文化と呼ぶのではなく、それが芸術家の精神の表現であるという点において文化になるのである。社会習慣も、単なるルールとしてではなく、その遂行者の精神的な関わりにおいて、文化にあるのである。

そのように文化を精神活動として捉えるとき、私はその精神活動の場を個人の内部においてみる。つまり、文化は個人の中にあると私は思うのである。後に詳しく触れるが、芸術は地域の精神の表現ではなく、個人の精神の表現であるし、既成の社会習

慣は個人によって行われることによって、個人の精神と響きあうことによって文化になると私は考える。

3. 「日本文化」ということばの矛盾

かつて、私が「日本文化」と聞いてイメージしたものは、一方で、葛飾北斎の「富嶽三十六景」などや法隆寺などの寺、つまり形として残っている、いわゆる文化財のようなものであり、他方で、「集団主義」ということばや通勤ラッシュなどの生活習慣や「国民性」と言われるものに関係したものであった。これは文化ということばを芸術などを表すものと生活習慣などを表すものとして使用していたことにそのまま対応していると考えてよいだろう。

だが、文化を個人の内部にある精神活動であると捉えたときに「日本文化」ということばは崩壊する。なぜなら、文化を個人のものとしたとき、それはけして「日本」とは結びつかないからである。「日本」ということばが指し示す対象は何かという議論は「日本事情」の授業中においても再三、話題になった。主に挙げられた「日本」の指し示す対象は、地理的な意味における日本、政治的な団体、つまり国家としての日本、また、日本語を母語とする集団であった。

しかし、日本を地理的なものとして捉えるとき、その国境が政治的なもの意外の何ものでもないことは明白である。「地図を見れば、そこに日本と書いてある」と授業中に発言した二十代日本人女性がいたが、もし、仮に現在の日本の領土が韓国の支配下であれば、そこは韓国と同じ色に塗られていただけであつたらう。また現在ロシア領となっている北方領土が日本に帰属することになれば、その色は塗り替えられ、日本の一部となることであろう。国家とは、けしてアプリアリに存在しているものでない。地図はその政治的イデオロギーを反映して作られているものであり、地図を片手に日本を地理的なものと捉えることには限界がある。

また、「日本語」を母語として話す人々の集団 = 日本という図式も成立し難い。理由は二つある。第一に日本には日本語を母語としない人々が多数暮らしている。古くはアイヌや在日朝鮮人であるし、新たに海外から労働者として移住してくる者も増えている。もし、日本というものが「日本語」を母語とするものだけが構成するものであるなら、彼らの存在は排除されてしまう。第二に「日本語」というものが確固たる実体を持った存在ではないということだ。よく引き合いに出されるのは、沖縄方言で

あるが、沖縄方言と東京方言を同一の言語と見なすはそこに政治的判断が加わっているからに過ぎない。その差はスペイン語とポルトガル語の差よりも大きいと思われる。このことは田中克彦の『ことばと国家』（1981）などに詳しいが、「日本語」という概念そのものが政治的な力にと深く関わっているということが出来るだろう。そもそも、現在の共通語は明治維新後の近代国家としての日本を成立させるために普及したという経緯を持っている。

以上の理由において、私は日本というものを政治システムとしての日本と捉えている。そのとき、「日本文化」とは政治システム、つまり国家としての日本の文化という意味になる。先ほど、私は文化を個人の精神活動と定義したので、国家という集団と文化は結びつくことは矛盾をはらんでしまう。よって、私は「日本文化」ということばは存在し得ないと考えている。

4．芸術・社会習慣と個

．芸術

では、具体的に文化としての芸術がどのように「日本」などの集団などでなく個人と結びつくかを検証する。我々は義務教育の過程で様々なものを「日本文化」として教え込まれてきた。現在日本という国家の領土となっている地域で築かれた多様な芸術や習慣をことごとく、明治以降に成立した近代国家としての日本の文化として取り込まれていったのである。しかし、ここで一つの疑問がわく。それは確かに現在日本といわれている地域の風土の中で生まれたものではあるが、それだけを理由に十把一絡げに「日本文化」と呼んでよいものだろうか。私はそうは思わない。その芸術ないし、習慣には各々、さまざまな要因の元に成り立っているはずである。その一つ要因に、ここが日本であったということがあったかもしれないが、それは多数ある中の一部分の要因に過ぎない。

例えば、葛飾北斎の浮世絵は本当に「日本文化」なのだろうか。先日、上野の国立博物館で北斎の連作「富嶽三十六景」の一つである有名な「神奈川沖浪裏」を見る好機を得たが、この絵画も、しばしば、「日本文化」の代表の一つのようにしばしば扱われ、歴史の教科書、資料集には必ず、その写真が載っている。おそらくその絵の見事さに加え、その中心となっているのが富士山であるということがあるのだろう。もちろん、北斎がこの浮世絵を描くことができた理由の一つに、彼が日本の国土で生ま

れ育ったということがあるのかもしれない。だが、日本ならば、どこでもよかったのだろうか。北海道に生まれていたら、富士山が描けただろうか。もし北斎が女性であったら、やはり同じ絵が生まれただろうか。社会位相が異なった場合がどうだろう。異なった親の教育のもと育ったとしたら、やはり浮世絵師を志したであろうか。どれもおそらく答えは否である。つまり、北斎が浮世絵を生むに至った過程ではさまざまな要因が複雑に絡み合っているのだ。そして、それはつまり、葛飾北斎にしか生み出せなかった作品なのである。ならばこれは「日本文化」ではなく、葛飾北斎の文化であるはずだ。

さらに、芸術、そのものではなく、それが精神活動と関わったときに文化が生まれるとするならば、一度完成した作品は次に受け手によって解釈されることによって、その受け手の文化となっていくと考えることができる。先日、上野の博物館で北斎の浮世絵を見ていた際、おそらくは美術もしくは歴史の教師が何かだと思われる初老の男性に出会った。彼は、北斎の構図のすばらしさについて延々一時間も私に講義してくれた。だが、絵画の心得のない私はただ北斎の青の美しさに見入っていた。彼の北斎と私の北斎は異なった意味を持ち、異なった現れ方をしていたのである。その解釈こそが精神活動としての文化である。

芸術は、その生み出した個人によってしか生み出せなかったという事実と受容者の解釈によって異なった意味合いを持つという二つの理由で個人の文化であるということが出来る。

・ 社会習慣

次に社会習慣であるが、私は「文化は精神活動である」という定義を提出する上で、社会習慣も背景に精神活動があるということを前述した。そのことに関して、12月10日の授業で二十代の日本人女性Bから指摘を受けた。彼女は、「社会的風習や習慣というものは集団によって築かれるものだから、そこには集団の精神があるのではないか。その集団を拡大していけば、日本にたどり着けるはずである。だから日本文化は存在するといえるのではないか」と主張した。だが、いったいどこに日本全国共通する習慣があるだろうか。国境によって明確に区別される習慣などというものが本当に存在するのだろうか。二年前の夏、タイの国境の町メーサイから徒歩でミャンマーに抜けたが、風景、食生活に大きな変化を見出すことはなかった。沖縄のラーメンとして知られるソーキソバは本州で我々が口にしているラーメンよりもむしろ、地理的に近い台湾のラーメンに味が近い。それでも、沖縄のラーメンが日本のラーメンの一種

として分類され、台湾のラーメンが中国のラーメンの一種として分類されるとしたら、その必然性は何であるか問わずにはいられない。

「多様化」ということばが「グローバル化」ということばとパラレルし、キーワードとして今日しばしば語られている。「日本文化」は多様なものを内在している。東京のラーメンと沖縄のラーメンが違っていても、それは文化の多様性であると考え人も中に入るだろう。しかし、仮に「日本文化」というものを想定して、その中には多様なものが混在していると定義する。さらに世界には多様な文化が存在していると外の多様性も同時に認めたとする。そのときに、内側にも、外側にも多様性を認めているのなら、「日本文化」ということばの必然性は全く失われるのではないだろうか。外側へと向くベクトルは地球文化へと向かい、内側へのベクトルは個人の文化へと行き着くはずである。

国境による「日本文化」「中国文化」という分類の問題点をあげたが、それでも、国境によらぬ、地域の文化というものを主張する人も当然いるはずだろう。しかし、その際に私が主張したいのは、私にとって、文化とは精神活動であるということである。そもそも私が文化の問題とのかかわりで問題にしているのは形式的な習慣ではなく、その習慣の後ろにある精神活動である。その場合、同じような習慣でも、それを体現する人によって、その習慣の持つ意味は異なるはずである。

確かに複数の人間が共同で生活する際にある一定のルールが生まれる。それが風習と呼ばれたり習慣と呼ばれたりする。だが、ここに一つのパラドクスが生まれる。習慣はその創造者であり継承者である人間の存在によって、存在できるのと同時に、その創造と敬称によって解体される、というパラドクスである。複数の人間の存在が、習慣を形成するが、その習慣の担い手はそれを個人の解釈によって行う。その際に個人を通した習慣は少しずつ、異なった形で現れる。一つの習慣に実態があり、それ完全な形で個人によって体現されるということはけして起こりえないのである。そして、個人によって変化した習慣はまた新たな習慣を生む。しかし、その新しい習慣もその行為者によって再び変化するのである。

これが習慣のパラドクスである。習慣は常に個人によって体現され、その際に個人の精神との関わりにおいて、その様式、意義を個別のものへと変化されることによるのみ、習慣として成立しうるのだ。文化を精神活動とするならば、習慣が精神と結びつくのは個人の中であるのだから、結局、社会習慣も一つの文化都市多彩も、文化は個人に内在するとして、何の矛盾もないわけである。

5 . 集団と個

では、文化は個人においてのみ内在するのだから、集団というものはまったく無意味なもので、そのようなものは幻想に過ぎない、と言い切れるのだろうか。それでは、窮屈な個人主義へと陥ってしまうだろう。そもそも、人間は関係の中でしか個人を形成することができない。他者との関係を排除し全てのコンテクストから完全に独立した個人というものが存在しないことは明白である。他者を認識することにより、また他者に認識されることにより、初めて人は自己を認識しうる。つまり、個というものは自分の暮らしている環境によって形成されるのだ。そのために、その個の環境を形成する集団が、個の形成に強く影響を与えることは考えうる。例えば、私は、男性であり、日本人であり、早稲田大学に所属している。これらの集団がある影響を私に与えていることは否定しない。一般にこのような影響を「文化」と呼ぶ傾向がある。「男文化」「日本文化」などである。だが、実際に「男文化」「日本文化」というものの影響を具体的に個人から抽出することは可能だろうか。私の人間性のどこからどこまでが「男文化」で、「日本文化」だなどと境界を定めることができるだろうか。私は不可能であると考え。なぜなら、環境はさまざまな要素が複合的、かつ有機的に結びついているからである。有機的に結びついて構成された環境は、それがひとつの環境として個と関わるため、どれが、どの影響かなどは一概に言えない。

また、環境が与える影響を個は鏡のように映し出すのではない。前に社会習慣について述べる際に言及したが、習慣の行為者はその行為する過程において、習慣を個別のものへと変化させる。ここでいう影響は社会習慣も当然含まれているので、同様に個人は影響に対し自分なりの解釈を持って反応するのである。

例えば、タイでは子供であっても頭をなでることは失礼に値するという。それも一つの習慣であろう。だが、当時私はそのことを知らずに、タイの北部の村で子供たちと過ごしていたとき、私は仲良くなった少年の頭を撫でていた。だが、彼は少なくとも嫌だというそぶりや、侮辱されたという表情は見せなかった。おそらくそれは、私とその習慣に対して無知であることを理解していたからか、私に悪意がないということがわかっていたからであろうと思われる。詳しくは知らないが、タイには頭を触ることは失礼だという風習があるらしい。時に人はそれを文化と呼ぶ。「タイ文化」などと名づけて。しかし、私はその風習を軽んじるつもりはないが、それは風習であって、文化ではないと考える。その風習の影響の下で育ち、なおかつ私との関係で、その風習をあえて適応しなかったその少年の心中にこそ、私は文化を見る。

もちろん、人間は様々な影響の下で育ち、その関係性の中で自己を形成する。しかし、人はその影響を一つ一つ取り出して、実体を見出すことはできない。さまざまな影響は互いに有機的に結びつき一つの環境を築いているということに加え、影響を与える側は、個人に影響を与えることによって、影響として存続するが、その影響は個人の中で個別のものの変容し、その変容によって、影響自体も変容を遂げる流動的なものであるからである。そして、個人の影響に対する精神的反応こそが、文化なのだと思はる。

また、そのようなひとつの影響に対する反応の個別差は個性であり、文化ではない。文化は画一の何かではなく、その中に多様性を含むという理論が展開されるかもしれない。十月二十九日の授業で二十代の日本人女性Cが次のように発言している。

「……個の文化、個の文化って言うことにはすごい抵抗があって、個は多様性であって、価値観の多様性であって、個の多様性はあっていいと思うんですよ。その個の価値観であるとか多様性を、時に私たちの文化って錯覚をする、逆に自分たちの文化って思われているものを自分独りの個の価値観、個の多様性だと思ってしまうときが自分の中にあるんじゃないかっていう……」

しかし、そのとき考えなければならないことはどこに文化の境界を引くのかという問題である。前段の社会習慣のところで具体的に触れたが、文化というものに特定の境界を引くことは難しい。多様性ということばを用いたとき、その多様化は個人へと収束していく。すると実は文化と個性を分ける境界などないことがわかる。むしろ、文化が精神的なものの体現とすれば、それは個性と密接に結びついているものと捉えられる必要があるだろう。

ここで芸術についても考えてみたい。前の芸術が後の芸術家に影響を与える。このこと事態は何の不思議もない。その意味において、芸術をさまざまな系譜で分類することに意味を見出すことも可能であろう。ただ注意しておかなければならないのは、近代的国家観が生まれたのは産業革命以降だとするならば、「日本文化」という概念は明治維新以後に作られたことになる。ということはそれ以前の芸術、その系譜を後の国家としての「日本」が文化として取り込んでいったと考えることはできないだろうか。皮肉なことに、大きく様式の違う西洋の芸術と触れる機会が少なかった日本国家が成立する以前の芸術群が、文明開化の名の下で西洋の芸術から影響を色濃く受けた日本国家成立以降の芸術より「日本的」と受け止められることが多いようである。

いずれにしろ、芸術の間で影響は確かにあるにせよ、それはあくまで影響として見なすべきである。それをひとまとめにして、「日本文化」という枠にくくってしまう

ことはできない。例えば、葛飾北斎らの浮世絵が、当時ヨーロッパに高値で輸入された陶器の包装紙として、ヨーロッパに渡り、モネやゴッホに影響を与え、印象派を誕生させたことは有名な話であるが、影響の系譜だけを重視するならば、北斎の絵が「日本文化」でモネの絵が「フランス文化」だという必然的な理由はない。逆に現在多くの日本人画家が海外で修行し、海外で創作活動を重ねている場合、なぜ彼らの絵は現代の「日本文化」の代表と呼ばれるのだろうか。やはり、そこに必然的な理由は見つからない。

このように芸術が様々な影響関係を持っているのは事実であるが、それを「国家」の文化として分類していくことはできない。それを国家によって色分けすることは、国家のイデオロギーの他の何者でもないだろう。そして前述のように、影響自体を文化とすることを私はしない。文化はその影響の中で培われていく精神である。

6 . ことばと文化

「日本事情」クラスの最終レポートで二人が、ことばと文化の関係を強く主張した。五十代の日本人女性Dは「私にとって、『日本文化』とは、自覚的に日本語を用いることのない集団である」と結論を出している。また、二十代の日本人女性Bは結論で「仮説では文化は個人の認識する‘ちがひ’であると述べていたが、そもそもその違いは個人の世界観によるもので、その世界観の基がことばであるとする、つまりまず文化はことばではないかということになる。そこから考えると、私にとって『日本文化』とは日本語であるという結論に至る」と述べている。

私は本稿の始めの方で日本語 = 日本という構図を、日本語という概念そのものの政治性から否定的に考察したが、ことばと文化の関係は非常に興味深いと考えている。ここで、日本人女性Dは「日本語」というものを厳然とした実体があるもののように捉えている点で、少々問題があると思う。日本人女性Bの場合は、文化を個別の認識と捉え、その認識とことばを結びつけている。実はその点までは私と同じである。ただし、そのことばの捉え方が私と多少、だが、決定的に異なる。レポートの結論部で彼女はことばを次のように考えている。

「……文化を語ることは個人を超えてはできないことだが、個人の中にある、その文化を形成する基となることばは個人を超えているもの、その土地の総称であり、そこに住む人たちの中での総称であるといえると思うからである」

ソシユールの用語を用いるなら、彼女にとって、ことばはラングなのである。だが私は、ことばを文化との対比において考えるなら、そのことばはパロールであるべきだと考える。これは私が習慣と個人の関係の構造を考える際に大きく示唆を受けた図書であるが、丸山圭三郎の『ことばとは何か』（2001）という本がある。もともとは1982年に出版された『フランス語とフランス人気質』という本の「ことばとは何か」という章を新しく一冊の本にして出版したらしい。その中で丸山は、ことばは物事を指し示す記号ではなく、物事はことばによって切り取られると主張する。つまりことばはその体系の中に規制の価値観を持ち、人はそれを否応なく押し付けられる。ここまでは日本人女性Bの考え方と似ている。しかし彼はさらに主張する。私たちは、その既成のことばを用い、新しいものを創造していく、と。体系としてのことばを学び、その枠の中で決まった形で私たちはことばを用いる。だが、それは決まった形のことしか表現できないということではない。私たちはそのことばで無限の意味を表現し、その中から新しいものが生まれてくるのである。いまさらトリュフォーの「野生の少年」の引き合いに出さなくとも、私たちが生まれ育った環境の中でことばを身につけることは周知の事実であろう。だが、我々は常に全く同じ言葉を同じ音で発音することがないように、完璧に同じ意味で用いることはない。つまり、体系の中で身につけたことばは、自らが用いる過程で、個別のものへとなる。ソシユールはこれをパロールとしたが、文化はまさにこのパロールの中に宿ると私は考える。

社会習慣の逆説を思い出して欲しい。その構造はそのまま、言語構造にも当てはまる。言語は話者により存続するが、話者により解体されるのである。その解体は個の精神活動との結びつきによって行われる。例えば、辞書に載っているだけのことばに意味はない。辞書で「希望」ということばを引いて、その意味を読んでも、それは文化にはならない。その言葉を人が自分の生活と結びつけて、自分の問題として語ったときに、初めて本当の意味を持つ。そのとき初めて「希望」ということばはその人の文化となる。人はことばによって世界を認識する。ことばが無くてはおそらく人は考えることができない。思考という精神活動が文化だとしたら、ことばはまさしく文化の中核にある。しかし、そのことばは、常に変化を続け、しかも、その境界は時に政治的な力によって引かれる体系として、ラングではなく、そのラングが人と結びついたときに生まれるパロールでなくてはならない。

7 . 結論

文化の定義は数百にのぼると聞いた。文化に対する客観的な定義などないのだろう。本当に客観的なものなど、どこにも存在しないと私は思うが。私は、私にとって文化とは、個人の精神活動である、と定義した。その定義に基づいて、「日本事情」クラスでの議論を経ることにより、私は、文化は個人の中に宿るものだという結論に行き着いた。従って、私は「日本文化」なるものは存在しないと主張する。

上記のように芸術は「日本」という枠に入れられる体系を有していないし、その精神は常に個人と結びつく。また、社会習慣は、個人によって個人的なものへと解体させられることによって、初めて習慣として成立しているというパラドクスの下にある。

その個人は関係性の中で成立しているものである。個は多様な影響の中で育つ。だが、その影響は実体を持たない。その実体のない影響を「文化」と呼ぶことを私は拒否する。その影響の中で育まれた個性こそを私は「文化」と呼ぶのである。

個の精神活動を支えることばは文化と密接に関係しているが、その個人を支える言葉はラングでなく、パロールであるということを見落とすべきではないと私は思う。

文化は「日本」などの集団の枠で分類されるべきものではない。それは個人の中に見られる多様な精神活動なのである。

参考文献

田中克彦（1981）『ことばと国家』岩波書店

丸山圭三郎（2001）『ことばとは何か』夏目書房